

博物館の場所論

荒木, 正見
福岡女学院大学 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1686463>

出版情報 : 人文学研究 : 福岡女学院大学人文学研究所紀要. 1, pp.1-24, 1998-03. 福岡女学院大学人文学研究所紀要編集委員会
バージョン :
権利関係 :

博物館の場所論

荒木正見

福岡女学院大学 人文学研究所紀要
人文学研究 創刊 第1輯
1998年3月

博物館の場所論

荒木正見

小論は博物館のあり方に関して哲学的場所論の見地から考察し、具体的な博物館の例を参考にしつつ、今後の博物館の可能性の一端を探るものである。

その方法として小論では、多種多面的な場所論の中から、根底的な概念として西田幾多郎の場所論の存在構造と、そこから生じる場所のダイナミズムに着目し、それが現実の博物館においてどのように現れているかを考察する。また、筆者なりに場所論の展開として理解しつつある元型的諸現象を考慮にいれつつ、考察を遂行する。

なお、引用文献における肩書きは文献発行当時のものを、聞き取り調査における肩書きも調査当時のものを使用したこと、及び、引用に際して旧漢字、旧かなづかいを現在のものに直したことをお断りする。

1. 哲学的場所論と博物館

まず、哲学的場所論と博物館という具体的な場所との関わりについて述べておかなければならない。はじめに、哲学としての根底的な場所の基本構造であるが、小論では西田幾多郎に従って、哲学的な概念としての「場所」とは唯一絶対的な存在そのものであるとする。このことは、「場所」論文(大正15年、『西田幾多郎全集 第四巻』岩波書店, 1949/1988年, 208-289頁)において述べられる述語論理によって示される。すなわち、すべての主語は、認識の際に、認識する主体によって限定を受ける。従って、そこからその主語に見合う普遍的な述語を捜すという過程を考えれば、述語こそが普遍的なものである。そして、最も普遍的な述語は「ある」という述語であるが、これも「ある」と言明すれば認識主体の限定を受ける。そこで、ぎりぎりのとこ

ろで、「ある」を外枠から指し示し、「ありか」すなわち「場所」と呼ぶのである。西田幾多郎のこの存在概念は、最も究極的な意味において主観的なものと、客観的なものが合一しているとされる。

さて、次に述べられるのが、場所のダイナミズムである。それは次のような「場所」自身の運動として捉えられている。

まず絶対的な存在である「場所」は、自らを限定することによって、個別的な存在を生じる。この場所自身による自己限定は、西田幾多郎においては「自覚」すなわち場所全体のダイナミズムによってわれわれの認識に現れた事柄であるとするが、日常的には個別的な事柄のすべてとみなしてよい。しかし、個もまた場所それ自身であるから、限定された特殊な様態をもって、場所を限定する。すなわち、個別的な事柄によって場所は特殊な意味を持ち、それは場所を豊かにすることでもある。この相互限定は、同時に生じる矛盾的な運動であるとともに、永遠に展開する弁証法的運動でもある。西田幾多郎は、真の弁証法について、一と多とが同一でなければならないとする（『西田幾多郎全集 第十四巻』岩波書店、1951/1988年、469頁）。すなわち、個と普遍（一般）とが同一であるとするのである。

次に問題になるのが、歴史性的問題である。西田幾多郎は、この個物的限定と一般的限定とは何処までも対立し、しかも一であるところに、弁証法的過程があり、それは、社会的・歴史的進行の世界であるとする（『西田幾多郎全集 第七巻』岩波書店、1949/1988年、191頁）。従って、歴史を反省することで、場所の自己限定と個別的な存在による場所の限定の意味が浮かび上がってくるとする。

さて、このように述べられてきた哲学的場所論は、普遍的な場所に関する理論であるから、具体的な場所に対しても適用されなければならない。特に博物館は、博物館の存立に関しても、また、博物館という建物やその内部に関しても、場所という概念と密接な関係がある。従って小論では、このような哲学的場所論の基本概念を手がかりにして、具体的な博物館を考察する。

2. 秋吉台科学博物館の場合

(1) 秋吉台科学博物館の成立

山口県美祿郡秋芳町秋吉台上にある秋吉台科学博物館は、上記の存在論的構造を考察するのに、最もふさわしい歴史を持つ博物館であると言える。同博物館発行の『秋吉台科学博物館要覧 秋吉台科学博物館 自然の探究』によれば、建築延面積は866.66平方m、敷地総面積は2,408.40平方mの、今日では小規模の部類に入るこの博物館は、以下に述べるように、見かけの大きさからは測ることのできない豊かな内容を持つ。それはまずなによりも、秋吉台という立地条件にあるといえる。

この博物館が設置されている秋吉台は、博物館発足直後の昭和38年(1963)に山口県美祿郡秋芳町から発行された秋芳町史編集委員会(高橋政靖委員長)編『秋芳町史』に、その概略が当該項目執筆者大庭青雨によって次のように記されている。

まず、地質学上「秋吉台カルスト」と呼ばれるのは「秋芳町を中心とし美東町および美祿市にまたがる石灰岩地層の広い範囲」とされ、「その総面積は約13,000ヘクタールで、北東から南面に17キロメートル、北西から南東に7.5キロメートルのほぼ平行四辺形に展開し、その規模は日本において最大」と述べられる(428頁)。さらに、「この台地は、台地の中央を北西より東南に向かって横断して流れる厚東川によって二分されて東台と西台とにわかれる。美祿市側の西台が主として大理石・石灰工業などの産業面に開発されているのにくらべ、秋芳・美東の両町にまたがる東台は学術・観光の両面に勝れ、その中で特にいちじるしい特長をもつ地域が昭和30年11月1日国定公園に指定された。公園の総面積は4,330ヘクタールで、その中の2,246ヘクタールが秋芳町に属している。またその中の1,384ヘクタールが昭和33年2月29日天然記念物の指定をうけて保護されており、その中の1,111ヘクタールが秋芳町に属している。」(428頁)とされ、普通秋吉台という場合には、東台を指すとされ、学術上東台を指す場合には「狭義の秋吉台」と表現されると述べられている(429頁)。

次に、この秋吉台に設立された当博物館の成立を顧みる。

秋吉台科学博物館が発足したのは、昭和34年(1959)年10月1日である。『秋吉台科学博物館要覧 秋吉台科学博物館 自然の探究』によれば、起工は昭和34年2月15日、完工は昭和34年9月15日である。その後、昭和40年5月に講座室を、昭和42年2月に研究室、資料室を増築、さらに昭和52年2月に玄関ポーチを古生物展示室に改築、昭和58年5月に講座室を増築して今日の規模に至っている。

同博物館発行『秋吉台3億年』(1981/1994年)には博物館設立の目的として「秋吉台の学術的重要性を全国の人々に紹介するとともに、秋吉台の研究の足場となり、秋吉台を保全してゆく拠点となるために」(7頁)建てられたとされている。この具体的な内容こそが、この博物館の本質を形作り、それはこの博物館の歴史から形成されてきたものであることはいうまでもないが、現館長庫本正博士のお話や、『秋吉台3億年』によると、その歴史は秋吉台という特定の場所の本質的意味を探る歴史でもあり、世界歴史の大きなうねりに突き動かされた歴史でもあった。

歴史的経緯の中で最も直接的に関わる事件は、昭和31年(1956)に発生した、秋吉台における米軍航空機による爆撃演習の申し入れであった。『秋吉台3億年』によると、それは昭和31年3月8日に中本京三秋芳町長に対して申し入れられたとされ、その内容は、笠木山を中心とした半径300フィート(約900m)の範囲における爆撃演習であったと述べられている(3頁)。これは秋吉台にとっての大問題であったため、『秋芳町史』でも15頁をさいて述べられている(462-477頁)が、小論では『秋吉台3億年』の記述によってその経緯を顧みる。

この事件が当時の世界情勢と密接に絡む事件であることはいうまでもない。歴史学研究会編『日本史年表 増補版』(岩波書店、1993/1994年)や、市古貞次他編集『日本文化総合年表』(岩波書店、1990年)などによって、東西冷戦の真ただ中にある国際情勢や米軍の状況に関する1956年当時の主な事件を列記してみるとそれは明きらかである。

まず前年1955年2月8日にソ連ではマレンコフ首相からブルガーニン首相に交代、一層積極的な外交を繰り広げることになる。5月14日にはソ連と東欧7か国がワルシャワ条約に調印、東側は結束を固めることになる。5月25

日には中ソ共同宣言が発表され、アジアにおける東側の影響も強化されることになる。5月には独自の社会主義路線をとろうとするユーゴをソ連首脳が訪問し、6月2日にベオグラード宣言が発表され、ソ連の東欧における影響が増大するとともに、東西の緊張も増大することになる。この緊張緩和を議題として米英仏ソの四巨頭がジュネーブで会談を開いたのが7月18日である。しかしジュネーブ精神と呼ばれた緊張緩和の精神は単なるポーズに終わり、実際には東西両陣営は軍備拡張競争に走るのであった。

このような東西冷戦という国際情勢のダイナミズムが背後にあるだけに、秋吉台に関わる、町長をはじめとする当事者は、苦渋に包まれたのであった。『秋吉台3億年』によると、明治時代から日本軍や米軍の演習地として利用されてきたという経緯はあるにせよ、今回の計画では大規模な自然破壊が目に見えているのであった（4頁）。

そのような国際情勢にもかかわらず『秋吉台3億年』には、1956年4月の町議会では全員一致で空爆演習地使用反対の決議が為され、次いで小沢太郎山口県知事も国に対して、受諾しない旨の返事をしたことが記してある（4-5頁）。

場所論として考えれば、軍事演習に使いやすい地形や荒野という場所的条件が、国際情勢という歴史的背景に起因するひとつの事件を呼び寄せたと理解することができるが、実際には、この使用反対の背景に、もっと大きな歴史的背景と、場所的条件が横たわっているのである。いうまでもなくそれは秋吉台の学術的価値である。

地理学、地質学および生物学的研究の詳細については、筆者は語るべき力量を持たないが、『秋吉台3億年』では、すでに大正12年（1923）に東京帝国大学の小澤儀明博士がのちに「秋吉造山運動」と呼ばれる地殻変動に関する中核的理論、すなわち秋吉台において石灰岩層が南から北への横臥褶曲という逆転現象を起こしていることを明らかにしたという、先駆的研究が述べられている（5頁）。すなわち秋吉台は3億年の歴史を持った重要な学術資料なのである。

また、当時急遽研究されたものやその頃の経緯をまとめた、山口県、秋芳町、美東町共編『秋吉台大田演習場小誌 一爆撃演習解除記録一』（1961年）

によると、山口大学浜田清吉教授は地理学の立場から学界の注目を浴びている理由を、1. 秋吉台のカルスト景観は「日本型のカルスト」の典型である。2. 秋吉台の石灰岩は広く高原状に露出し、カルスト現象の幼年期、壮年期、老年期の各時期を併せ持つ。さらに、石灰岩の純度の高さも相まって、カルスト地形のあらゆる現象を示している。3. 新石器時代からの人類居住の痕跡がある。等々と述べている（120～121頁）。

さらに同書によれば、九州大学鳥山隆三教授や山口大学高橋英太郎教授、山口大学河野通弘助教授などは、地質学の立場から、秋吉台を先の小澤儀明の業績から近代地質学発祥の地と位置づけ、東京大学小林貞一教授は「佐川造山輪廻論」などの著作において、「古生代の間海底堆積を行っていた日本が初めて一大山脈として海上に姿を現わした」この地殻運動を「秋吉造山運動」と名づけ、それが古生代末期のオーストラリア東部、ニュージーランドからシベリアに至る大造山運動のひとつであることを論じたとされている（123頁）。

同書にはその他にも画期的な業績が紹介されているが、いずれも秋吉台が地質学的にも地理学的にも生物学的にも世界の学術研究の重要な資料であることが説かれている。

秋吉台を場所論として考察する場合には、その歴史の方向性を捉えなければならぬが、まず、最も根底的な歴史はこの3億年前に起こった大造山運動にあると言わなければならない。

そして、空爆演習地反対運動の理論的中核もこの点に焦点を合わせて展開し、『秋吉台3億年』によれば、日本地質学会や日本地理学会、日本学術会議などの決議がなされるなど国の内外の研究者を巻き込んだ大反対運動へと発展していったとされる（6頁）。

場所論的に考えれば、この反対運動の方法は当を得ていたといえる。なぜなら、それが3億年前という原初の年代に位置するということと、世界的造山運動の一角を形成するという点で、時間的空間的に世界中の人々の普遍的な意識を刺激したからである。現実にはまた一般的には、この種の反対運動の理由は単純ではない。この場合も、農業的理由、観光的理由、民族感情等々さまざまな他の理由もそれなりに存在した。当事者にとってはそれは切

実な理由であり、本来そのどれに対しても無視することはできないはずである。しかし、それらはこの学術的理由に比べれば、より限定された理由である。残念なことではあるがそれだけでは、国際的緊張という大きな目的に基づく演習地指定に対して説得力を欠くのである。

『秋吉台 3 億年』によればその運動の象徴的な一日が昭和31年 8月25日であったとされる(6-7頁)。当日、大平正芳代議士を団長とする衆議院内閣委員会の調査団が現地を訪れ、山口県知事や学識経験者などの報告や陳情を聴取したのである。そしてその結果、昭和31年 9月12日に、小沢太郎山口県知事は、秋吉台を爆撃演習地として使用しない旨の防衛庁長官からの電報を受け取ることになる。

さて、この一連の運動が秋吉台科学博物館の設立となって結晶することになる。そして、この経緯を考えれば先に述べたこの博物館の目的が当を得ていることは明らかである。そして、場所論的に考えれば、秋吉台科学博物館という個の成立は、地球規模の、さらには存在そのものの自己限定の結果であることはこれまでの経緯からも明らかである。すなわち、唯一絶対の存在の壮大な自己限定が歴史という具体的な運動を遂行し、その結果、秋吉台科学博物館という個が成立したのである。もちろんそこには人間の尊い努力が関与する。庫本正『洞窟にいどむ 一秋吉台三億年の歴史を探る一』(福音館書店、1985年)には、開設に努力してきた恵藤一郎館長が安堵感から昭和34年10月開館のわずか二か月後に急死されていることも記されている(34頁)。

さて、場所論によれば場所の自己限定によって成立した個は、また、場所を限定し、豊かにしていく。この場合は、秋吉台科学博物館とその関連の諸活動がこの個による場所に対する限定に相当する。

これまで述べてきた成立事情からいえば、秋吉台科学博物館の諸活動の中核に学術研究が位置づけられることは当然である。この学術研究については、地質学、地理学、生物学などの諸研究がこの博物館を中核として開始され成果をあげてきた。それらの成果は1961年から1996年までの間に31号を数える『秋吉台科学博物館報告』や1969年から1975年の間に6号を数えた『洞窟研究』などに次々に発表されているし、また、『西秋吉台鷹ヶ穴石灰洞』(1981年、

187頁),『秋吉台雲出原 一中規模観光レクリエーション地区一』(1985年, 90頁),『秋吉台南山駐車場学術調査報告書』(1993年, 69頁),『秋芳洞の地下水 一汚水流入に伴う緊急影響調査報告一』(1995年, 32頁)などの学術調査, 研究報告書なども発表されている。

例えば、『洞窟にいどむ』(34-38頁)『秋吉台3億年』(23-28頁)によれば, これまでの研究成果の継続と確認そして画期的発展に関してひとつの成果が紹介されている。それは, 同博物館学芸員太田正道博士を中心とする, 秋吉台の地質構造における逆転現象の確認である。地形測量や地質調査, 化石採集によって昭和43年にとりあえずは逆転現象を確認したのではあるが, さらに博物館の研究グループはより直接的な資料を得るためにボーリング調査を企画した。職員も予算も小規模なこの博物館の並々ならぬ努力は『秋吉台3億年』に詳しいが(25頁), 1970年から1972年に行われたボーリング調査の結果得られた成果は努力に報いるものであった。海拔226mから深度250mに掘り進まれたボーリングによって得られた石灰岩を観察した結果, 地下162mまでは掘るに従って新しい地層が現れ, そこから急に, 掘るに従って古い地層へと至ることが判明したのである。これで直接的に, 逆転現象が確認できたことになる。この逆転は古生代の終わりから中生代のはじめにかけて起こったことであると説明されている。

このような研究が可能になったのも, 秋吉台という場所が個としての博物館や研究活動を限定したということであるし, そのダイナミズムによって秋吉台科学博物館が設立されたからにはほかならないが, 場所論の立場から言えば, このような研究が行われることがまた, 博物館を特徴づけ, 博物館を豊かに表現することになる。それは, 秋吉台という場所に対する本質的意味を付加することになるという重要な機能を果たすが, また, 同時に存在そのものの普遍的な場所に対する豊かさを与えることでもある。これが, 個による場所の限定という場所論のダイナミズムを意味することはいうまでもない。

(2) 博物館の機能

さて, いま博物館の機能を顧みれば, まずは博物館法の規定を確認しなければならない(『六法全書 平成9年度版』有斐閣, 平成9年, 1-1994

頁)。博物館法第二条では、博物館の定義としては「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」とされている。なお、その個所には公民館、図書館を除くことや、設置規定などについても触れてあるが、小論では省略する。また、以降述べられる「博物館資料」とは上記「博物館が収集し、保管し、又は展示する資料をいう」とされている。さらに第三条では、博物館の事業が述べられている。以下、コメントを加えつつ列記する。

「一 実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び展示すること。 二 分館を設置し、又は博物館資料を当該博物館外で展示すること。」

ここまでのところは、「収集」「保管」「展示」について述べられている。

「三 一般公衆に対して、博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置してこれを利用させること。」

ここでは「博物館資料の利用」について述べられている。

「四 博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。 五 博物館資料の保管及び展示等に関する技術的研究を行うこと。」

ここでは「研究」について述べられている。

「六 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。 七 博物館資料に関する講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。」

ここでは「広報活動」について述べられている。

「八 当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)の適用を受ける文化財について、解説書又は目録を作成する等一般公衆の当該文化財の利用の便を図ること。」

ここでは「文化財の利用」について述べられている。

「九 他の博物館、博物館と同一の目的を有する国の施設等と緊密に連絡し、

協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借等を行うこと。十学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。」

ここでは「協力」について述べてある。

また、第三条の最後には、「博物館はその事業を行うに当っては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。」

ここでは「国民の利益」と「教育」について述べてある。

これらの定義や事業が、小論で述べられる機能に相当する。そしてその機能についてまとめると、例えば加藤有次『博物館学序論』（雄山閣出版、昭和52年／平成4年）によれば、「学術研究のために必要な場としてとらえられ、またその教育的配慮、あるいは大衆の慰楽の目的を満足させるために、文化的・科学的に必要な資料を収集し、保存し、展示する恒久的な機関」（74頁）とされている。すなわち、研究、収集、保存、展示、がその主要な機能であるとされている。

また、湯本豪一編『美術館・博物館は「いま」 現場からの報告24篇』（日外アソシエーツ、1994年）では、現場からの報告を整理する項目に、「集める 一資料・作品の収集」「のこして伝える 一資料・作品の保存」「みせる 一資料・作品の展示」「調べる 一調査、研究について」「学び合う 一講演会・学習講座・ワークショップ」「知らせる 一広報・企画情報・イベント活動」「育てる 一学芸員実習」「記憶する 一コンピュータによる情報化作業」「協力しあう 一友の会・ボランティア活動」が記されている。ここでは、収集、保存、研究、学習、広報、教育、などがその重要な機能であると考えられている。

当の博物館におけるこのような機能の発揮、すなわち具体的な活動は、本来唯一絶対の存在そのものである、全体としての場所による自己限定として、当の博物館という姿をとり、さらにその博物館という個としての特定の場所が自己限定する仕方であり、同時にその活動は逆に博物館を豊かに限定し、さらにそのことが、全体としての場所を豊かにするという運動なのである。

(3) 秋吉台科学博物館の活動

さて、秋吉台科学博物館の場合、まず、その個としてのあり方を強調するものとして、先に述べた研究内容の展示があげられるのはいうまでもない。この博物館の入館料は無料である。社会に対して研究や収集の成果を広く提供するという理念からいえば最もふさわしい姿である。ガラスケースやパネル、標本箱といった展示は、コンピューターを駆使した他の博物館に比べればやや地味な感じもするが、オーソドックスな展示を詳細に観察すると、実物資料の展示という点や確実な知識の提供という点で重厚な感じがする。同博物館発行『秋吉台科学博物館35年のあゆみ』（平成8年）によると、展示の理念としては「学芸員が研究テーマとして取り上げ、十分研究を続けた結果を提示する」（14頁）と述べられるが、その成果が窺える。同書によって展示とその製作年代を列記すると以下の通りである（14-16頁）。地球の歴史ジオラマ（昭和34年）、秋吉台の化石（昭和34年、昭和53年、昭和62年）、秋吉サンゴ礁（昭和53年・昭和63年）、秋吉台の地質（昭和43年）、帰り水の地質構造（昭和43年）、秋吉台周辺の岩石・鉱物（昭和34年、平成1年）、山口県の地質図（昭和43年、平成5年）、第四紀の脊椎動物の化石（昭和52年）、秋吉台のカルスト地形（昭和34年、昭和54年、平成6年）、秋吉台の洞窟（昭和34年、昭和54年、平成2年）、秋吉台の地下水系（昭和53年）、秋吉台の気象（昭和55年）、秋芳洞の微気候（昭和55年）、秋芳洞口の生物（昭和42年、平成4年）、洞窟の動物（昭和42年）、秋吉台のコウモリ（昭和42年、平成5年）、秋吉台の陸貝・淡水貝（昭和34年、昭和40年、昭和62年）、草原の動物（昭和50年）、秋吉台の哺乳類・鳥類・爬虫類・魚類（昭和34年、昭和40年、昭和60年）、秋吉台の植生（平成2年）、秋吉台と人（昭和34年、昭和54年）、秋吉台を開いた人々（昭和35年、昭和44年）、屋外展示（フズリナ化石、観音洞の敷石遺構、厄神の組合式箱式石棺、生きた化石と呼ばれている植物など）（昭和35年、昭和40年）以上。また、講座室では「秋吉台三億年」「秋吉台の自然観察」「秋吉台の生物（コウモリの生態編）」「秋吉台のカルスト」「私たちのまち秋芳洞」などの各20分の16mm映画を随時上映している。これらを見れば明らかのように、秋吉台に関わる科学的内容はほぼ網羅されている。庫本正館長のお話によれば、この博物館は特に企画した特別展をするのではなく、常

設展示を少しづつ充実し、改訂することに徹しているそうである。予算などの制約という理由もあるが、研究成果を着実に展示するという方向性を意識しているといえる。

なお、『秋吉台科学博物館35年のあゆみ』によれば、年間入館者数はここ数年13万人台から15万人台を推移している(50頁)。一見地味な展示のわりには多数の入館者があるのは、場所の有利さが一番にあげられようが、その有利さを実際の活動に生かしている博物館関係者の地道な努力があつてのことである。研究活動や、以下に述べる広報、教育活動に加えて、展示にもその努力が感じられる。

次に、この博物館のあり方を強調するものとして広報活動の充実が挙げられる。

はじめに一般向けの解説書の充実が挙げられる。これまで発行されたものを列記すれば、『秋吉台・秋芳洞』(1963年, 69頁), 『秋吉台の自然』(1966年, 59頁), 『秋吉台の洞窟測図集』(1978年, 29頁), 『秋吉台 3億年』(1981年初版発行/1994年改訂12版発行, 88頁), 『秋吉台 一草原の自然史一』(1982年/1983年2版, 49頁), 『秋吉台の自然観察』(1984年初版発行/1993年改訂3版, 88頁), 『カルスト台地と鍾乳洞』(1986年初版発行/1995年4版, 47頁), 『秋芳洞の自然観察』(1988年発行/1991年改訂4版, 88頁), 『秋吉台の洞窟』(1989年, 32頁), 『秋吉台の気象』(1995年, 54頁)などは、B5版サイズの豊富な頁数に写真や図版を駆使し、子供でも読める工夫がされつつも最新の成果と高度な内容を保つように学芸員や職員が努力した賜物である。

また、ガイドブックとしてA5版の小冊子が数多く発行されてきている。『地質見学案内 一秋吉台一』(1971年, 29頁), 『ガイドブック 一秋吉台の地質一』(1982年, 改訂2版, 32頁), 『化石ガイドブック』(1989年, 9頁), 『秋吉台をさぐる 秋吉台の地下水 一水の汚染一』(1982年, 6頁), 『秋吉台自然研究路』(1989年, B5, 16頁) などという単独の冊子に加えて、『秋吉台・秋芳洞の人物史』シリーズ(1~4, 1984-1985年, 各4頁)や、1980年に第1号「秋吉台の古生代化石」を発行して以来、1989年まで70号を数えた『自然に親しむ』シリーズ(各5頁)など、幅広い分野に互った精力的な活動の成果が見られるのである。

さらにこの博物館は、これらの成果を教育活動に積極的に生かしている。

昭和55年に発足した「秋芳自然教育研究会」は、その後「秋吉台の自然に親しむ会」へと受け継がれるまでに、研究会の成果を公表するために昭和58年から平成元年まで『秋吉台の自然を子供たちと学ぶために』というシリーズを8冊発行した。その内容は表題にふさわしく真摯に自然教育を考えるものである。また、「秋吉台の自然に親しむ会」は、同様に、自然に対する接し方や、自然の知識を掲載した機関誌『THE MY AKIYOSHIDAI』(VOL. 1, No. 1, 1997)を発行している。

また、昭和55年に始まった「秋芳の自然研究奨励」という企画は、小中学生の自然研究の成果を表彰することで自然研究を奨励するものであるが、『秋吉台科学博物館35年のあゆみ』によれば、昭和55年度から平成6年度までの応募数は212点と述べられている(20-23頁)。

また、同書によると(17頁)、平成6年度の統計では333校、27014名にも及ぶ修学旅行生に対して、講座室での懇切な説明を含む指導や、さらには、電話による質問に対する応答など、数名の職員が献身的に教育活動にも従事している。

場所論的に言えば、これらの諸活動が、個による場所の限定というダイナミズムを一層推し進める働きをすることはいうまでもない。

そして、これらの展示や広報活動、教育活動を質的に支えるのがすでに述べてきた研究活動であることもいうまでもない。

研究が場所による個の限定であり、同時に、個による場所の限定でもあるというのは、先に述べたこの博物館成立の事情や、ポーリング調査の例や研究の成果からも明らかであるが、この博物館にはさらに特徴的な活動を指摘することができる。それは、カルスト大地特有の数々の洞窟に関する研究である。

秋吉台は古来通称「台山」と呼ばれ、例えば天保から弘化ころに記されたとされる『防長風土注進案 17 美禰宰判』(マツノ書店、昭和58年)に、「右東は大田、南は秋吉、西は嘉萬 青景、北は赤 絵堂都合六ヶ村に根おろし仕候山にて惣名秋吉台という 土地は紫色にて間に間に寒水石あり」(240頁)と記されるように、広大な台地と独特の景観として知られていた。その秋吉

台を観光地として有名にしたのはその下に広がる鍾乳洞秋芳洞であるといってもよい。観光コースだけでも約1km、総延長は現在確認されているだけでも10km以上という巨大な洞窟である。同博物館発行『秋芳洞の自然観察』（1988/1991）によれば、古来「滝穴」と呼ばれていたという。歴史的にはむしろ、恐ろしい伝説があるように、雨乞いの場であったり、神秘的な畏怖の対象であった時代が長い。『秋芳洞の自然観察』によれば、それを観光地へと一変させたのは、20世紀初頭、梅原文次郎によるものであるとされる（80-81頁）。明治37年（1904）にこの地を訪れた梅原文次郎はこの洞窟の学術調査を山口高等商業学校のイギリス人教師、エドワード・ガントレットや広島高等師範学校の中目覚に依頼する。そしてこの滝穴の価値を知った梅原文次郎は、エドワード・ガントレットの滝穴紹介文が英国の雑誌に掲載された明治42年（1909）に、滝穴開窟式という大イベントを挙げる。草競馬、相撲大会、もちつき大会、レコードコンサートなど華々しい行事に滝穴は一挙に観光地の名を得たのである。大正11年（1922）には、滝穴と景清洞とがわが国最初の天然記念物に指定され、同時に滝穴の管理は秋吉町に移行される（81頁）。その後、大正14年（1925）には、滝穴に電灯施設が許可され（85頁）、観光に一層の拍車がかかることになる。大正15年（1926）、皇太子殿下（昭和天皇）が滝穴に行啓され、秋芳洞と命名される。当時のことであるから、皇太子の訪問という栄誉を地元民が大きく受け止めたのみならず、全国の観光客を集めることになる（81頁・85頁）。戦後すぐ昭和24年（1949）、皇太子殿下（今上天皇）が秋芳洞を探勝し、また、昭和27年（1952）には特別天然記念物に指定され、また、昭和30年（1955）には、秋吉台と秋芳洞を結ぶエレベーターが完成するなど（82頁・85頁）、秋芳洞は名実ともにわが国の一級観光地としての地位を保ってきた。有料入場者数が年間100万人を越えたのが昭和39年（1964）である。その後、昭和50年（1975）の山陽新幹線開通の年にほぼ200万人を数えたのをピークとして、おおむね150万人前後を推移している。近年はモータリゼーションの発達で手軽な観光地というイメージも定着してきている（86頁）。

もちろん学術調査は、華々しい観光開発の陰で着々と継続した。天然記念物指定に先立つ大正8年（1919）には、東京帝国大学神保小虎教授を中心と

した学術調査団が、指定のための調査に訪れ、地元の恵藤一郎が学術案内人として参加したとされる(81頁)。戦後になって昭和27年(1952)、特別天然記念物に指定されれば、それを機に一層洞窟の研究が盛んになる(82頁)。しかし、なんといっても系統的継続的な研究が可能になったのは、昭和34年(1959)に秋吉台科学博物館が開館してからである。

さて、博物館活動の一環としてこの秋芳洞を捉える場合、幾つかの側面が指摘されるが、『秋芳洞の自然観察』にはそれらの側面が手際よく項目別にまとめられている。

まず、洞口および洞内の探勝、すなわち直接的な観察である。観光名所だけに名称も興味を魅くように名付けられている。淵としては一の淵、二の淵、三の淵(龍の淵)、長淵、琴ヶ淵などと名付けられている。また、入口近くの巨大な空間を青天井、そこにある石筍群を六地藏、石灰華段丘を百枚皿、広い段丘を広庭、天井からなだれ落ちてきた土砂を石灰が山や石柱状に固めた洞内富士、それぞれの姿に固めた大松茸、南瓜岩など、また、石灰華段丘の千町田、鍾乳石の傘づくし、大黒柱など、さらには、巨大な落盤の跡である千畳敷、その一隅に突っ立つ石灰華柱の黄金柱など、見物の対象としては枚挙にいとまはない。しかし、博物館活動として重要なのは、それらの成因が調査され、その成果を報告されるところにある。この冊子はそのひとつの手段であるといえる。

その調査研究をさらに列記すれば、例えば秋芳洞の水系の集水域の研究、秋芳洞を作っている母岩、秋吉石灰岩の研究、地下水の成分の研究、さまざまな洞窟の形態と分類の研究、洞窟の堆積物に含まれる動物化石の研究、洞窟の溶食形態の研究、洞窟生成物の研究、洞窟の微気候や動植物研究、さらには危険を伴うケイビングによる調査研究など、地道な研究が次々に行われている。

それらが場所論的には、秋芳洞や秋吉台という場所に限定された個を追求する作業であり、その作業によって個々の状態が一層正確に理解されることによってそれがまた、秋芳洞や秋吉台を一層豊かに限定する作業であることはいうまでもない。

そして、そのような作業のひとつの典型が「コウモリ穴実験室」である。

庫本正『コウモリ —地下実験室からの報告—』(福音館書店, 1983/1995年)や(43-44頁), 庫本正館長のお話によるとその経緯は次のようなものである。

博物館が開館してからすぐに, コウモリなどの洞窟生物を研究するための地下研究所が強く望まれはじめた。予算のゆとりもない状況で, 学芸員太田正道博士がリーダーシップをとって, 博物館員自ら, 通称コウモリ穴と呼ばれてきた洞窟にこもって土木工事などを行った結果, 1961年初頭には洞窟そのものを実験室として利用することができるようになった。『秋吉台科学博物館報告 第1号』(秋吉台科学博物館, 1961年)所収の秋吉台科学博物館学芸係によって記された「秋吉台科学博物館附属こうもり穴実験室について」では, 設立の目的として, 洞穴のさまざまな生物や諸現象の研究のために洞穴内に, 実験室や研究室などの設立を必要とするとされた後, 「秋吉地方は日本でも多くの石灰洞があり, これら洞穴学研究のためには最も都合の良い場所とされている。そこで本館は本館の使命に則り, 秋吉台科学博物館附属こうもり穴地下実験室を設立することを計画した。なお此の種の地下実験室は日本で初めての試みである。」(68頁)と述べられている。これこそ場所による自己限定の表明であり, この施設が作られ, 研究の成果を上げることが, 個による場所の限定である。

奥行き約200mのこの地下実験室は, 自然の洞穴をそのままコウモリの観察ができるように利用したほか, 地下水棲動物や陸棲動物の飼育, 実験, 観察ができる設備を備えたり, など工夫が為されているが, その重要な成果のひとつが庫本正博士の学位論文「秋吉台産コウモリ類の生態および系統動物学的研究」(1971, 1, 26)である。この論文の抄録は同じ表題で『秋吉台科学博物館報告 第8号』(秋吉台科学博物館, 1972年, 7-119頁)に掲載されている。また, 神戸大学自然科学研究科の森永速男を主筆とした「石匂の古磁気記録と古磁気永年変化曲線との対比による石灰洞窟内の崩落の年代決定 —百合野の穴の一例—」(『洞窟学雑誌 第13号』日本洞窟学会, 1988年, 37-45頁)も, この研究室に生まれた貴重な成果の一例である。そのほかにも, 『秋芳洞の自然観察』などに記されている洞窟生物の研究にこの施設が重要な役割を果たしたのである。

かくして, 秋吉台科学博物館では, 歴史的経緯を振り返れば一層明らかに

なるように、恵まれた場所的環境に基づく研究を軸にして、豊かな研究成果を、収集、保管、展示、広報活動、教育などの博物館機能の各場面に展開し、大きな成果を挙げている。

もちろん、ひとつの地方の町という自治体には、経済的な制約も予想できる。場所論的な発想からすれば、場所の全体的なエネルギーが不足した場合には、エネルギーの増大を図るか、エネルギーの質の向上を目指すことになる。質の向上とは、目的を絞った統合性を持つということであり、人的組織の場合には各人の質の向上を図るということである。秋吉台科学博物館の場合には、秋吉台の研究を主軸とするという統合的な目的からすべてが派生し、それに徹しているからこそ大きな成果を挙げていると言える。そして、それをさらに徹底するためには、運営に関わる方々の、研究や諸活動に携わる時間的なものを含めた総体的なエネルギーを保証することが、いっそう必要であろう。また、その過程において博物館全体としてエネルギーを増すことへの新しい工夫も必要になるだろうが、一時的な流行に振り回されて本質を見失えば、逆にエネルギーは消滅してしまうことも忘れてはならない。

秋吉台科学博物館の場合、博物館の機能に基づいて、ひとつ新たな可能性を考えるとすれば、研究の国際協力が挙げられる。庫本正館長のお話によれば、かつてそれを考えられた時期もあったそうだが、当時は機が熟さなかったそうである。しかし、今日、近隣諸国の経済成長も進み、国際協力が行いやすい環境が整いつつある。歴史的経緯を顧みれば、恵まれた場所的条件は国際的な研究にふさわしいと思われる。

さて、このように秋吉台科学博物館を例にして場所論的な考察を行ったが、そこで一層明らかになってきたことは、博物館の成立が、その場所の本質的意味と密接に繋がり、従って、博物館の諸活動もその場所の本質的意味と結びつき、その活動を通して、再び、場所の本質的意味を豊かにするというダイナミズムであった。このダイナミズムは他の博物館の場合も同様に現われるのであろうか。それが次章の課題である。

3. 各地の博物館における成立と活動

先に述べたように、ここでは場所論的ダイナミズムのうち、主にその成立と、成立に関わる本質的活動について、ふたつの博物館の例をあげつつ考察する。

(1) 相模原市立博物館

秋吉台科学博物館が場所による個の限定が強く感じられる博物館であることはすでに述べた通りであるが、これに対して個による場所の限定のダイナミズムが強く感じられる博物館として、相模原市立博物館が挙げられる。

相模原市立博物館は平成7年（1995）11月に開館した極めて新しい博物館である。平成7年に同博物館から発行された『相模原市立博物館』によると（14頁）、施設概要は以下の通りである。

「敷地面積 9,999.48平方m／構造 鉄筋コンクリート造一部鉄骨・鉄筋コンクリート造・鉄骨造／規模 地下1階・地上3階建て／建築面積 5,081.03平方m／述べ床面積 9,510.24平方m」

「用途別：

展示・教育	展示スペース	1,907平方m
	学習スペース	453平方m
	プラネタリウム	648平方m
保管・研究	研究スペース	1,038平方m
	収蔵スペース	1,570平方m
管理・共用	管理・共用スペース	3,894平方m」

また、「相模原市立博物館条例」によると、その「設置」として「郷土の自然及び文化並びに天文に親しむとともに、これらに関する理解を深める場を市民に提供することにより、郷土を愛する心をはぐくみ、生涯学習の振興を図り、もっていきいきとした市民文化の創造に寄与するため、博物館法（昭和26年法律第285号）第2条第1項に規定する博物館として、相模原市立博物館（以下「博物館」という。）を相模原市高根3丁目1番15号に設置する。」（『相模原市立博物館』16頁）とされている。

この施設概要や条例にも博物館の特徴が現れるが、それは後に触れるとして、まず、その設立における、場所論的な特徴を考察する。

1996年4月に相模原市立博物館の長嶋正樹管理係長に伺ったところによると、この博物館は学校教育および生涯教育を強く意識した総合博物館として設立されたとのことである。これは先の「条例」における内容とも一致する。

相模原市は人口約58万人。長い間、関東ローム層の台地上の農村であったが、近代は基地の町として、また現在は、基地の一部を残しつつ、東京都に隣接する住宅地として、また、横浜の中心部へも30分で行ける住宅地として発展している。これに伴う急激な人口増加に対して、学校新設などの基本的な施設に予算を取られ、博物館や美術館などには手が回らない事態が続いていた。一方、市内の各地にあった米軍基地が返還されるに伴い、市はその跡地の有効利用に着手する。市立博物館のある淵野辺地区ももとの淵野辺キャンプであるが、国立宇宙科学研究所や東京国立近代美術館フィルムセンターを設置、博物館は昭和55年（1980）4月に相模原市総合計画に建設の検討が盛り込まれてから15年かけて開館にこぎ着けたものである。市としてもこのような予算状況でもあり、今後の人口増加も考えられるため、学校教育と一体化した博物館を想定したとのことである。

この「学校教育」というのも、基地の町から住宅地へという歴史の変化を背景にした場所の自己限定である。しかし、先の秋吉台科学博物館に比べると、場所論的意味が異なることに気づく。秋吉台科学博物館は、いわば3億年という歴史の必然性があり、その場所でなければ成り立たない研究テーマや博物館としての同一性があつた。これに比べて、相模原市立博物館の場合は、物理的に空いた場所が生じ、それを市民にとって最も必要な姿の博物館設置へと結びつけたのである。哲学的な考え方のひとつに「自然発生的 (genetic)」と「規約的 (conventional)」という対比がある。前者は、geneticに「遺伝子の」という意味があるように、文字通り人間の事情などよりももっと深いところで成立するものであり、後者は、conventionalに「慣例の」という意味があるように、人間が決めたというものである。秋吉台科学博物館が「自然発生的」な要因の強い博物館であり、相模原市立博物館が「規約的」な要因の強い博物館であるということもできる。そして、そのような博

博物館は、場所による個の限定よりも、個による場所の限定というダイナミズムが強くなる。

この事情を前提にして、相模原市立博物館の全体を見ると、要点の各所にその前提が反映していることが分かる。

まず、博物館のある場所だが、市域全体を眺めるとその苦勞が窺える。相模原市の繁華街は、橋本、相模原、淵野辺の、JR横浜線上の三駅周辺に分散し、最も中心のJR相模原駅の東北に隣接して、現在も広大な米軍基地があり、商業や住宅地区が分断されている。このように都市計画が遂行しにくい状況で、市南東部の淵野辺地区の基地が返還されたために起こった都市計画であった。JR淵野辺駅は市南東の隅に位置するが、東京や横浜に出るにはこのJR横浜線を利用するので、鉄道沿線としての親近感のある土地でもある。博物館はこの淵野辺駅から直線距離では約1kmである。道路が屈曲しているために歩くと20分程度かかるのはやや遠い感じがある。途中のバス利用も時間的には差がなく、老人や弱者にとって交通アクセスはやや難である。しかし、住宅地の中の基地跡地を学校や公園、研究所などに再開発した地域だけに、市民にとってはなじみのある、利用しやすい場所でもある。

この場所について場所論的に考えれば、交通アクセスについては、その成立事情を考えればやむを得ないというべきである。全体をなじみの持てる地域を目指して再開発中という市側の努力を買うべきであろう。その上で、今後いっそう便利な交通アクセスや道路整備を期待する。

さて、以上のような事情から、学校教育との関わりを考えれば、総合博物館がふさわしいが、この「総合」とはまず博物館法における博物館の活動との対応から考えられる。相模原市立博物館の場合、案内冊子にも示されるように次のような活動内容として展開される。

- 1) 相模原を感じる・・・博物館は、相模原を考える際の様々なヒントを提案する。
- 2) 相模原を知る・・・展示は、相模原に関する知識の宝庫。
- 3) 相模原を調べる・・・相模原をより深く知ることができる資料を公開する。
- 4) 相模原を残す・・・古文書や、民具、様々な標本類を収集、保管する。

これらの活動内容からも明らかなように、また、先に述べた「施設概要」や「市条例」における「設置」にも明白なように、その中心には「郷土相模原」がある。従ってまず、常設展示としての「自然・歴史展示室」は、基本テーマとして「川と台地と人々の暮らし」と名付け、以下の5つのスペースにそれぞれのテーマを展開する。

第1スペースは「台地のおいたち」である。二百万年前には海であったことから始めて、堆積し隆起した相模原台地の姿を立体模型で示し、また、マンモスの頭蓋骨を展示するなどリアリティを増している。

第2スペースは「郷土の歴史」である。原始時代の巨大な土器、仏教遺産、実在する屋敷の模型、古文書、開拓農家の実物大復元などを展示して、主に相模原の近世までの歴史を一望できる。

第3スペースは「暮らしの姿」である。相模原は政治的な歴史としてみれば中世史に乏しいという特徴があり、資料面で片寄りが生じるが、逆にそのゆとりを他ではあまり扱わない、近世以降の農業資料を集め、専門の学芸員の手で、当博物館のひとつの特徴として展示してある。農家の物置を移築したり、もはや使われなくなった農具を、使っていた当時の写真とともに展示したりなど工夫がなされている。

第4スペースは「人と自然のかかわり」である。実物大の段丘崖を作成し、狸や兎、鳥の剥製などを展示し、失われつつある相模原の自然を再現している。

第5スペースは「地域の変貌」である。相模原の近代以降の現代に至る歴史を示す看板や日常の家具、道具、また、軍都であった資料なども展示されている。

このように常設展示においては、学校教育を意識して、相模原の地理、歴史、自然などを総合的に知らせるように工夫されている。そしてそれによって博物館の機能が学校教育、さらには生涯教育を志向していることが示されるのである。

ところでそのような教育志向は、さらに設備に反映されている。最も特徴的なものが、プラネタリウム、天体観測室、そして天文展示室である。先にも述べたように、相模原市の文化的特徴のひとつに国立宇宙科学研究所を有

するという点がある。この博物館の真向かいがこの宇宙研だという事情もあり、博物館に宇宙をテーマにしたエリアを設けようということになったが、ここで再び学校教育の事情が生じた。今日の学校教育では、プラネタリウム見学は必須であるが、それまで相模原市にはその施設が無く、わざわざ横浜まで生徒を引率していたのである。相模原市立博物館にプラネタリウムが設置されたのはこのような事情による。このプラネタリウムでは、40-50分程度のいわゆるプラネタリウムのプログラムの他に、同じ位の時間の全天周映画なども上映されている。

また、地階の大会議室(236平方m)は、広さもさることながら、利用者のアメニティを意識して、木張りを中心とした暖かい仕上げになっている。この木の暖かさというのは、博物館を含むこの地域一帯の再開発のテーマでもある。いうまでもなくそれは「武蔵野」という語のイメージを生かそうというものである。従って、この博物館も「森の中の博物館」として周囲に木々を植えたりなどして、全体の暖かいイメージを保っている。

その他、市民研究室(232平方m)や情報コーナーなども市民のための教育を意識しているといえよう。

さてこのように、相模原市立博物館は、場所論的ダイナミズムを考えれば、場所が個を強く限定するというよりも、個すなわち博物館そのものが、市民のニーズによって独自の考え方と設備を擁し、そのことによってむしろ強く場所を限定していくというダイナミズムが観察される。しかしもちろん、展示内容を顧みれば明らかなように、場所そのものが全く無関係というわけではない。深い所で常に個を限定し続けている場所のダイナミズムはこのような成立事情を持つ博物館でさえ明らかにみてとることができるのである。相模原市立博物館もまた、このような双方のダイナミズムを有効に利用して博物館と都市作りとの双方に生かしているといえる。

(2) 横浜市歴史博物館

相模原市立博物館と同様、横浜市歴史博物館も新しい博物館である。それだけに、その成立には他には少ない特徴があり、また、他方、他と共通の成立事情も指摘できる。それは場所論的にも指摘できる。相模原市立博物館に

特徴的であった個の側がむしろ強く場所を限定するという特徴と、また、秋吉台科学博物館などと共通の、他の多くの博物館にみられるような、場所が個を限定するというダイナミズムとの双方が指摘できるのである。

横浜市歴史博物館は、1995年1月31日に開館した。敷地面積は7,278.527平方m、規模は地上6階地下1階、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造、延べ床面積は9,269平方m、高さは30.95mである。そしてその所在地は、神奈川県横浜市中区中川中央1-18-1である。横浜市北部の港北ニュータウン建設地のほぼ中央に位置する。交通はJRおよび新幹線新横浜駅から横浜市営地下鉄で5駅目10分余り、「センター北駅」で下車し、約300m徒歩5分である。開館時にはそのまわりに家はなく、開発したばかりの赤土の宅地が広々と広がるという状況であった。また、それを裏付けるように「センター北」駅は、地下鉄といたって高架になっており、ここからも新たに開発した地域であることがわかる。また、駅名の「センター」は、これからこの辺りを開発の中心地区にするという意味である。

このことから明らかなように、この横浜市歴史博物館は、いわば白紙の土地に生活の場の中心的な機能を持つ施設のひとつとして設立された。そこには当然地域おこしの中核という機能が要求される。「横浜市歴史博物館ニュース No.1」(1995年3月)によると、開館の1月31日から3月末までの入館者数は41,099名であったと報告されている(2頁)。新しい住宅地の宣伝という意味では大成功であったといえる。いずれ住宅や公共施設が立ち並べば、この博物館は、近隣の人々の憩いの場であり、同時に、横浜市民や関東一円の歴史愛好家を集める交通至便の博物館となるであろう。

1996年4月に横浜市歴史博物館の前沢和之学芸課長に伺い、また、「横浜市歴史博物館ニュース No.1」における平野邦雄館長の「開館のあいさつ」(2頁)によると、この博物館は横浜市初の歴史博物館として、歴史の中核になったことのない横浜の歴史を見直し、これまでの多くの歴史解釈に見られるように支配者の側から歴史を見るというのではなく、より下層の一般人によって支えられてきた歴史の意味を再確認するということと、横浜という地域から全国に歴史の新しい情報を発信すること、という目的をもって開設されたとのことである。

もちろん横浜にはこれまでも歴史に関係のある資料館は数多く存在した。特に横浜港周辺には、明治以降の洋館を利用した資料館や歴史的価値のある建築群が歴史村を形成しているといってもよい。一例を挙げると、明治時代に建築された旧横浜正金銀行の建物を利用した神奈川県立歴史博物館、コリント式の柱と銅拭きのドームを持つ横浜郵船ビル(日本郵船歴史資料館)、横浜税関(資料展示室)、昭和6年建設の旧イギリス領事館の建物を利用した横浜開港資料館などはその代表的な建物である。しかし、これまで横浜市の歴史を一貫して展示する施設は存在しなかった。それが、この横浜市歴史博物館設置のひとつの理由である。

ところで、これまで述べてきた設置理由だけを考えれば、それは相模原市立博物館と同様、場所論的には、個による場所の限定というダイナミズムを強く感じるかもしれない。しかし、横浜市博物館の設置場所には歴史の意味合いが含まれているのである。

横浜市教育委員会社会教育部文化財課編集「横浜歴史博物館(仮称)開館準備ニュース 第1号」(平成4年11月)によると、「昭和56年12月よこはま21世紀プランで、港北ニュータウン地域からの出土した考古資料等を後世に継承するため『考古資料館』の建設構想が提示される」とある。これが当博物館建設の端緒である。すなわち、この博物館はそもそもニュータウン建設中に発見された考古資料を保存するための施設として、当初、1981年に計画されたのである。同資料によれば、昭和60年(1985)によこはま21世紀プラン第二次実施計画において、今日の充実した機能を持つ「歴史博物館」構想へと発展したことが記されている。そして、翌昭和61年(1986)1月31日に、先に発見された考古遺跡「大塚・歳勝土(さいかちど)遺跡」が国の史跡に指定されるのである。

「横浜市歴史博物館ニュース No.3」(1996年3月)によると、この縄文時代から奈良時代までの遺跡、「大塚・歳勝土遺跡」が、3月23日に大規模な遺跡公園として、横浜市歴史博物館の東にオープンすることが報じられている。東西920m、南北830m(約6.6ha)という広大な敷地に、竪穴式住居、高床式倉庫、環濠などを復元し、また、発掘時の竪穴式住居跡を型どり復元した遺構など、大規模な遺跡公園である。やや標高のあるこの遺跡公園には、横浜

市歴史博物館の三階屋上から連絡橋で渡れるようになっている。

さて、このような事情から、常設展示のテーマが歴史であることはいうまでもない。常設展示室（1,866平方m）のうち937平方mを占める通史展示室は、原始1、原始2、古代、中世、近世、近現代の6つの時代に区分されている。展示は実物を展示するだけでなく、模型や図を多用し、学童などにも分かりやすい展示を心がけている。これも、住宅地の中心を意識した演出のひとつであろう。同様に、80席を有する歴史劇場は、CGやアニメを随所に挿入した15分の映像で横浜の歴史を見せるものである。筆者も生徒たちが楽しむ姿を目撃したが、学校の見学などでは興味を魅くものである。

このように、横浜市歴史博物館は歴史的場所という場所による自己限定によってその設置と性格が決定され、それが、ニュータウン計画というやや迂遠な場所論的限定をさらに受けて、現在のあり方が決定したといえる。そして、博物館という個が完成すれば、それが逆に人々を引き寄せ、その場所一帯を特徴づけるというダイナミズムを発揮する。この個による場所の限定にふさわしく、展示や、環境整備も加速されるその姿はすでに考察したとおりである。

ところで場所論の一端としての空間における人の流れのダイナミズムを考慮すれば、この博物館の持つひとつのジレンマに至る。観覧者は1階正面のエントランスホールから入り、ホール左側の受付で切符を購入し、その背後から左側に向かって階段を上り、2階左側の常設展示室や企画展示室へと至る。常設展示室内部では右回りに回って観覧することになる。はじめに、この時計回りに進む全体的な右回りが、展示場などでは珍しいのである。これは人間の癖として、例えば芸術療法では右方向が意識的な方向性であるとされるように、右に意識的な方向性を感じているからである。従って、はじめに会場に入ろうとする場合にはまず右に進もうとする。そして展示場内部では身体の右に意識すべき展示物を置きつつ進行する。すなわち左回りに巡回するのが自然である。現実には、この心理を考えたうえで設置してあるかどうかは不明であるが、世界中の博物館や美術館の比率としては、圧倒的に、陸上競技場のトラックと同じ左回りが多いためである。その意味で、この横浜市歴史博物館には、何か特別の理由があるのではないかと考えることが出来

る。

実はそれに加えて、この横浜市歴史博物館の左側に展示室があるというのは、運営上も難点があることが指摘されている。階段を上がって右側には、講堂、研修室、研究室などがあるが、この博物館の諸設備のうち、展示室を除いて、規則上来館者が利用できるのは、講堂（右側）、研修室（右側）、体験学習室（左側）、図書閲覧室（左側）等である。

展示室を含めたこの左側に位置するものは利用時間が午前9時から午後5時であるのに対して、右側の施設は利用者の便宜を考えて、午後9時までとなる。人の流れを考えればわかるように、午後5時以降の利用者は左側のエリアを通過して右側のエリアに出入りする。ところで、左側の展示室では、展示替えなどで鍵を掛けることもできずに、貴重な資料を出し入れしている。このような防犯上の問題はいずれの博物館でも頭を悩ませる問題であるが、ここまではっきり分かっていながら設計段階で手を打てなかったのは、よほど重要な事情があることが想像できる。

この事情こそが、隣接の「大塚・歳勝土遺跡」との関係である。先に述べたように、この博物館と隣接の遺跡公園とは、博物館屋上の通路で車道を越えて結ばれている。このことは利用者の便宜を考えたすばらしい設計であるといえる。しかも、この博物館にとってこの遺跡は設立に関わる本質的な意味さえある。その遺跡公園が左側に広がっているのである。従って、展示室などの施設は左側に集めなければならなかったというわけである。地下鉄駅との関係からいっても、建物の向きをかえるわけにはいかなかったであろうし、おそらくは悩んだ末での選択であったと思われる。

このように場所論の発想はまた、新たな疑問を生み、その疑問がまた、この博物館の本質的意味を指し示すことになる。この考察もまた、場所の自己限定と個による場所の限定との相互運動なのである。

4. 場所論と博物館の可能性

これまで述べてきたように、博物館を考察する際に、その設立、施設、活動のすべてにわたって場所論的発想を用いてみることもまた有効であると考

えられる。小論では特に、場所論のひとつの目安として、場所の自己限定と個による場所の限定との相互運動の様態に着目して、具体的な博物館を考察してみた。

秋吉台科学博物館に関しては特に、博物館と場所論との関わりについて総合的な考察を試みたが、その中からも、この博物館は、場所の自己限定のダイナミズムが強く現れた博物館であることが明らかになった。また、相模原市立博物館は、場所の自己限定というよりはむしろ、個すなわち博物館そのものの目的が逆に強く場所を限定するというダイナミズムが見られた。さらに、横浜市歴史博物館においては一見、相模原市立博物館と同様なダイナミズムが示されるのであるが、その設立の過程を振り返り、歴史博物館という目的などを考察すれば、当初は場所の自己限定のダイナミズムが強く働き、それに個の目的が強化されていったことに気づくのである。

このように、各博物館は場所のダイナミズムに着目しただけでもそれぞれの事情を有するが、まずはその事情を自覚した上で、具体的な運営に携われれば大きな見通しが立ち、それぞれの博物館の真の個性を構築することができるであろう。一般に理論とは、物事を具体的に考察していくための地図のようなものである。無くても目標に行き着くことは出来るが、ある方が合理的に行動できることはいうまでもない。

では、小論で述べてきた場所のダイナミズムを具体的な博物館運営に生かすとしたらどのような可能性や問題点が考えられるであろうか。それを考察するためにはまず、場所のダイナミズムの再検討をしなければならない。

小論の1. で述べ、繰り返して述べてきたように、場所のダイナミズムとは相互的な運動であるとともに矛盾的な運動でもある。この矛盾を最も典型的に現わすのが、西田幾多郎における、唯一絶対的存在すなわち場所と個物との関係である。西田幾多郎はこのようなダイナミズムを現わす真の弁証法について「一というものがすっかり多にならなければならぬ」（『西田幾多郎全集 第十四巻』469頁）と述べ、個が個としてある時には全体的統一が消失することを述べる。反面、それら個を統一する唯一絶対的な存在としての場所もまた確固として存在するのであるから、これは矛盾である。

この矛盾は例えば横浜市歴史博物館の人の流れの問題に示されたように、

場所と個々の事象との矛盾となって現れるし、環境と個々の活動、社会や土地や歴史と個々の活動などという対立となって現れる。その場合、一般的には中村雄二郎『場所 トポス』（弘文堂、平成元年）で述べられるように、「おのれの存立の基盤、おのれがそこから発生した基盤に深く鉛錘を下ろし、基盤を自覚し統合しつつ、それから自立すること」（245頁）がふさわしい。すなわち、場所という全体的な統一に一方的に組してもならないし、個に固執してもならない。双方が相互に運動し合っこそ発展すること、そしてその発展を直接担うものは個そのものであるというダイナミズムの緊張こそが最も重要だということを自覚しなければならない。

ここで小論の場所論の立場からこのダイナミズムの緊張に焦点を合わせて、具体的な博物館の例を顧みつつ、また、小論 2. (2)で述べてきた博物館の機能に照らし合わせながら、博物館の可能性について若干の考察を加える。

これまで述べてきたように、特定の博物館の成立とその博物館の機能とは密接な関係がある。秋吉台科学博物館の場合は場所の自己限定のダイナミズムが強く働いた結果の成立であったといえるが、他方、個としての人々の博物館設立に至る努力やその後の研究などの諸活動の努力という個による場所の限定がなければその後の維持発展はあり得なかったであろう。その、個による場所の限定の際に、そもそもの場所の本質の意味を適確に探り当てたからこそ統合的な発展がもたらされたこともすでに述べた。その意味では、秋吉台科学博物館の場合は基本的には現在の継承発展が当面望まれるところである。

しかし、このように場所の本質と結びついたテーマを貫きやすい博物館においてさえ、順調に発展するためには問題もある。ダイナミズムのエネルギーの問題である。それは常識的にはエネルギーの量、すなわち予算の問題である。一般に地方自治体では、博物館の運営に対する予算配分に苦慮しているのが現状である。独立採算が成り立たないばかりが、独立に考えれば大幅赤字が常識なのである。予算を増やせばそれが最もよいことで、他の干渉を受けずに、その博物館の場所論の本質に適った、博物館独自の研究や展示、広報活動ができる。予算不足を押してなおかつ独自性を保ち、さらに発展させようとするような、例えば「コウモリ穴実験室」の設置にみられるような

館員の尊い努力も存在する。しかし、それもいずれ限界がある。エネルギーの量を増すことが得られない場合には、自主性は犠牲になるが、例えば、村上義彦『新しい地域博物館活動』（雄山閣、1995年）に述べられるように（26-32頁）、調査を外部団体に委託するという方法も考えられる。また、学芸員が大学や研究所、省庁などの研究グループに所属して、その一部門として当の博物館に必要な研究を行うということも考えられる。展示、広報活動にしても同様である。このような努力は、全国すべての博物館で実行されていることだといってもよい。

さらに、エネルギーの量を増すことが困難な場合には、エネルギーの質、すなわち合理的なシステムや統合性を追求することになる。これらの問題は場所論の重要なテーマでもある。先に、「場所という全体的な統一に組してもならないし、個に固執してもならない。双方が相互に運動し合ってこそ発展し、その発展を直接担うものは個そのものであるというダイナミズムの緊張こそが最も重要だ。」と述べたが、この合理的なシステムや統合性の追求において最も考慮しなければならないのがこの点である。合理的なシステムに関しては、個々の博物館の状況を、場所論をはじめとする様々な概念を駆使して検討するしかないが、統合性については次のように述べることができる。組織あるものは統合性を保てばエネルギーが少なくて済むというものである。

博物館の場合、最も典型的な統合性はテーマである。秋吉台科学博物館、横浜市歴史博物館というように、科学、歴史などとテーマを限定すれば、エネルギーが少なくて済む。特に秋吉台科学博物館のように場所の自己限定のダイナミズムが強い場合には、その場所に合わせた博物館活動を行うことができる。横浜市歴史博物館の場合は、それほど場所の自己限定ではないため、工夫を必要とする。そのひとつは、場所の自己限定が強い側面を生かした遺跡公園である。一般的な歴史博物館の場合には、村上義彦『博物館の歴史展示の実際』（雄山閣、1992年）で、一般的な展示方法に懸念が述べられ、改善策が検討されている（7-24頁）。懸念は、今日最も一般的な歴史展示法の「通史展示法」に関して、通史をストーリー化し、それにあらかじめ選定しておいた歴史資料を当てはめるというこの方法は、膨大な手間と時間を必要とし、そのわりに理解されにくいというものである（8-9頁）。同書では、

その解決策として、抽象情報の具体化、具体物の抽象化展示法、文化財展示法、復元展示法、融合展示法、行動展示法などの方法が列記してあるが、実際にはそれらを選択的に混在させて展示することになる。詳細な考察は省くが、横浜市歴史博物館の展示は新設の博物館だけあってこれらが有効に利用されている。

この統合性について最も困難だと思われるのは、総合博物館の場合である。予算的な制限のある中でなにかも収集し展示するのは無理である。そこで多くの場合、総合といいながらも、何らかのテーマを設け、それに合わせて統合性を保とうとする。相模原市立博物館の場合は学校教育や生涯教育を志向しているというのが、いわば隠れたテーマである。その意味では、社会、自然、文化のすべてに互って満遍なく展示しなければならないという宿命がある。その側面においては、学問的に深く追求するというより、実物や模型を分かりやすく配置して、相模原の時間的空間的な全体像を理解させるという工夫が為されている。また、相模原市の特徴と学校教育上のニーズから、宇宙を特別のテーマとしてプラネタリウムさえ擁する博物館となっている。さらに、先に述べたように、近世以降の農業資料の収集という特徴的な部門がある。比較的安価に手に入り、しかも相模原台地に根づいてきた農業資料の収集や展示は、宇宙という未来と対比する過去としても興味深いものである。

かくして、小論で例示してきた各博物館はそれぞれの場所論的意味合いを背負って、その本質を発揮しつつあるといえるが、場所論的ダイナミズムを積極的に捉えて新しい博物館像を作ることもしできる。それは、場所の自己限定によって成立した個の側から、その自己限定の内容自身を増幅して、もう一度場所そのものへと投げ返すという意識的な作業である。これは先に述べた「ダイナミズムの緊張」でもある。

具体的には、博物館の機能のそれぞれにおいてこの作業を行わなければならないが、空間的な側面から言うならば、地域全体に広げて考えるということである。その最も分かりやすいのが町並み保存との連携である。例えば、秋吉台科学博物館や横浜市歴史博物館の状況を、町並み保存地区に移して考えれば良い。町並み全体が文化財と見なされ、博物館はその情報の中核を為

すとなれば、さまざまな可能性が考えられる。収集、保管、展示、研究などが、博物館と町並み全体で行われることは当然であるが、博物館資料の利用や文化財の利用も、より大規模に、例えば町おこし行事や祭との連携などで行うことができる。広報活動や学校教育、生涯教育に至っては建物としての博物館に限定するのではなく、日常の中で有効に行うことができる。もちろんこの場合には、町の住民の健康で便利な生活の保証など、独特の問題も生じてくる。そして何より重要なことは、そのような広範な企画を計画し遂行する博物館関係者の能力の問題がある。このような広範な企画はこれまでの博物館学教育を超える部分を含むとともに、一般的に言っても柔軟で広範な能力を必要とするからである。そしてもちろん、学校、公民館、行政などとの密接な連携が必要なことはいうまでもない。ここにも人材の問題が顔を出すのである。このように博物館の建物を町並み保存地区に置いて考えれば分かりやすいように、博物館の機能の一部を普遍的な場所に相当する背景に移し替えるということなども可能であろう。その場合も人材が問題になることはいうまでもない。

かくして、場所論という側面から博物館を考察してきたが、問題は今後にある。すなわち、博物館とは具体的現実的な存在であり、それぞれの博物館にはそれぞれの事情がある。その事情を解決するには、その博物館そのものの成立と本質を詳細に検討しなければならないのである。これもまた、場所論の重要なテーマである。

〈資料一覧〉

* 一覧資料は直接使用したものに限定した。

1. 『西田幾多郎全集 第四巻』岩波書店, 1949/1988年
2. 『西田幾多郎全集 第十四巻』岩波書店, 1951/1988年
3. 『西田幾多郎全集 第七巻』岩波書店, 1949/1988年
4. 『秋吉台科学博物館要覧 秋吉台科学博物館 自然の探究』秋吉台科学博物館, 発行年不詳
5. 秋芳町史編集委員会(高橋政靖委員長)編『秋芳町史』山口県美祢郡秋芳町, 昭和38年
6. 『秋吉台3億年』秋吉台科学博物館, 1981/1994年

7. 歴史学研究会編『日本史年表 増補版』岩波書店, 1993/1994年
8. 市古貞次他編集『日本文化総合年表』岩波書店, 1990年
9. 山口県, 秋芳町, 美東町共編『秋吉台大田演習場小誌 一爆撃演習解除記録一』山口県, 秋芳町, 美東町, 1961年
10. 庫本正『洞窟にいどむ 一秋吉台三億年の歴史を探る一』福音館書店, 1985年
11. 庫本正『コウモリ 一地下実験室からの報告一』福音館書店, 1983/1995年
12. 『六法全書 平成9年度版』有斐閣, 平成9年
13. 加藤有次『博物館学序論』雄山閣出版, 昭和52年/平成4年
14. 湯本豪一編『美術館・博物館は「いま」 現場からの報告24篇』日外アソシエーツ, 1994年
15. 『秋吉台科学博物館35年のあゆみ』秋吉台科学博物館, 平成8年
16. 『防長風土注進案 17 美禰宰判』マツノ書店, 昭和58年
17. 『秋芳洞の自然観察』秋吉台科学博物館, 1988/1991年
18. 『秋吉台科学博物館報告 第1号』秋吉台科学博物館, 1961年
19. 『秋吉台科学博物館報告 第8号』秋吉台科学博物館, 1972年
20. 『洞窟学雑誌 第13号』日本洞窟学会, 1988年
21. 『相模原市立博物館』相模原市立博物館, 平成7年
22. 『横浜市歴史博物館ニュースNo.1』横浜市歴史博物館, 1995年
23. 『横浜市歴史博物館ニュースNo.3』横浜市歴史博物館, 1996年
24. 横浜市教育委員会社会教育部文化財課編集『横浜歴史博物館(仮称)開館準備ニュース第1号』平成4年
25. 中村雄二郎『場所 トボス』弘文堂, 平成元年
26. 村上義彦『新しい地域博物館活動』雄山閣, 1995年
27. 村上義彦『博物館の歴史展示の実際』雄山閣, 1992年

*なお、これらの資料収集や小論作成のための聞き取りについては、秋吉台科学博物館の庫本正氏、相模原市立博物館の長嶋正樹氏、横浜市歴史博物館の前沢和之氏に、特に貴重な時間をさいいただきお手を煩わせた。心から感謝申し上げますとともに各博物館のいっそうのご発展をお祈りする。